

『人類と地球の持続可能性と 21 世紀の学問、科学技術のあり方』の一文について

2016/08/01 宮野公樹@国際高等研

そも「持続可能性」から問いたい。
あまたある生命体の一つでしかない人間が、
なぜ地球全体の持続を考慮し希望しなければいけないのか。
間違いなくそこには、人間の利がある。
人間はそれほどまでに頂点か。
その観点こそが人間自身を苦しめていることになぜ気がつかない。

利と理

今を生きる我々は、もの考えるときついつい<利>を使う。
実利、利益、損得、説明、分析、論理。
このような仕方しか考えられなくなっている。
そして、このような仕方こそが正しいと思っている。
この物的な良心はいまや人間自身を圧迫し、
もうそれに押しつぶされそうになっているではないか。
考えてみる。電気がない世でも人は生きていたではないか。

他方の<理>は、
理性、ことわり、常識、認識、信仰、感情、想像。
我々の本性は、そも計り得ない精神である。
全身全霊という言葉があるように、
そういう考え（むしろ思い）の仕方をとうに忘れてしまっている。
考えてもみろ。物を物として認識するのもまた精神ではないか。
生や死というそのものが目に見えないように、
我々は精神的な存在であることは、説でも主義でも信仰でもなく、
単なる事実である。

この利と理の関連具合が激しく崩れている、特に学术界において。
学問は、かつて言葉という精神が対象だったのに、今や目に見える現象の説明でしかない。
学問こそが最もぶれさせてはいけない軸をいとも簡単に自ら手放したのだ。
楽な方へと、楽な方へと…

「このような話は浮き世話。理想や空想であって現実とは違う。
こんな話に意味は無い」

というなら、あなたは現実というものはき違えている。
なぜ現実において理想を語れないのか。そのギャップにこそ悩むべきなのだ。
まさにその分析な考え方で、本来1であるものを2や100に別けたからこそ、
このようになってしまったのではないか。
解決したいというなら、別れたものを元に戻すようにするほかないではないか。
別れたままで何を対策しようが、それは表層であり核心ではない。

今、私には7ヶ月の赤ちゃんがいます。
顔を近づけるとにっこり笑います。
その瞬間、

《 乳児は無抵抗で受動的な存在。攻撃されたら直ちに負ける。
ゆえに敵に対して無害であることを訴えるために、反射特性としてにっこり笑うのだ 》

という、どこかで耳にしたなんとまあ科学的な「説明」が私の心に現れてしまう。
客観を冷徹と勘違いし、少し上から目線で物的に「説明」をすることでわかった気になる。
ほんとうの<科学>はそうではないだろうに。

目の前のこの我が子は、その絶対的存在においてかわいいのであって、
私の全人格、全精神、全宇宙をもって迎えるべき存在、認識なのだ。

今、学問あるいは科学に激しく欠けているのは、このような<理>である。

もちろん、様々な「説明」は時に人を救い、問題を解決することもある。

しかし、説明もまた認識であることを忘れてはいないか。

小利口で小生意気な説明に終始するような偽物の<学問>または<科学>には一塵の価値もない。

特に今<科学>はその狭く厳しすぎる自身の態度によって自身が傷ついているのではないか。

(当事者たちはそれに気づいているかどうかは定かではない)

さらにほぼ同時に、どうしてもこの科学的説明が私の心から抜けない事実にもた、私は愕然とする。

かくも<科学>が世界観とまでなったその理由が我が内にあるのだ。

では、どう生きる？

以上